

# ブックガイド

No. 17 2016. 1. 16

## ■文学・体験記

『遺体 震災、津波の果てに』

石井光太／著 新潮社 2011.1 369.31/㊦11X

震災・原発事故から5年となります。いやおうなく、あの日の光景が画面に映し出されることでしょう。最近、カウンターで返却されてきたこの本を受取りました。中身は釜石の遺体安置所でのできごとですが、福島でもあったと推測できること。震災直後に「テレビ画像に遺体が映らないのはなぜ？」と、質問されたことを思い出しました。当時は目をそらしたいことも歳月の癒しにより受け入れられるようになったのか、貸出の多い一冊です。

## ■メディア 報道

『3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える』

名嶋 義直／編 ひつじ書房 2015.3 369.36/㊦153

3.11 後、原発事故に関する公表や報道等が多くなされました。本書は、それらメディアの言説をただ受け取っているだけで良いのだろうか、という疑問を投げかけています。実際の記事や広報などを対象に、言語学的な検証を通して「批判的な読み」を行っており、私達がメディアに触れる際の参考にもなります。「その批判的視点を本書を読む際に活用していただくことも大歓迎」という一言も良心的な一冊です。

## ■各組織の震災対応

『震災被災者と足湯ボランティア 「つぶやき」から自立へと向かうケアの試み』

似田貝 香門／編著 生活書院 2015.7 369.31/㊦157/

「足湯ボランティア」活動を目にした方、参加した方もいるのではないのでしょうか。本書は足湯ボランティアのはじまり、活動内容、実際にボランティアをした人の声がまとめられています。ただ寄り添って話を聴くことは何気ないことですが、被災者の心のケアに非常に貢献していると本書で述べています。専門的な知識や経験がなくとも被災者の悲しみや不安を和らげることができるボランティア活動で現在も新しい広がりを見せています。

## ■農林水産業・動物

『鼓動 感じて欲しい小さな命の重み。』

犬猫みなしご救援隊／著 書肆侃侃房 2012.3 LS645.6/I2/1

NPO 団体「犬猫みなしご救援隊」による、福島第一原発 20 キロ圏内に取り残された動物たちの救出活動を綴った一冊。病気、野生化、警戒区域への指定、限られた時間の中で続けられた壮絶な活動が、写真とともに記録されています。

繋がれている動物たちは勝手に保護することはできない決まり。「必ず迎えに来るから」と頭を撫でる無念。「できるなら、全頭連れて帰りたい。」目を背けてはならない事実を、私たちは知ります。

## ■農林水産業・動物

『東日本大震災4年目の記録 風評の厚き壁を前に』

寺島英弥／著 明石書店 2015.4 LS369.31/T15/4

河北新報編集委員である著者の震災4年目の活動記録。被災地を丹念に取材し、原発事故による風評被害に苦闘する漁業者、農業者たちの姿をありのままに伝えています。子や孫の世代のための道を必死に模索し続ける年配者と、見通しの利かない苦しい未来に敢然と立ち向かう若者。描写される当事者たちの苦悩と希望が、「何も終わっていないという現実」を浮き彫りにし、静かに重く、胸を衝きます。

## ■復興 防災

『想定外を生まない防災科学 すべてを背負う「知の野生化」』

田中 隆文／編著 古今書院 2015.9 519.9/㉗ 159

災害における“想定外”を生まないために「知の野生化」を提唱している砂防学会公募研究会の研究成果をまとめた一冊。理想的な条件を揃えた繰り返しの実験から抽出していく科学を脱却し、災害の個別性と一過性を多角的に見つめなおす科学について、実践例をもとに紹介しています。災害情報をどのように発信する必要があるのか、蓄積して活用していくのかについても言及し、今後の防災科学の考え方を知ることができる一冊です。

## ■こども向け

『ダンゴウオの海』

鍵井 靖章／写真・文 フレーベル館 2015.1 P/㉗

ダンゴウオは東北地方沿岸の浅海域に生息しているそうです。水中写真家である著者は、東日本大震災直後にもぐった岩手県宮古湾の海の底で、一匹のダンゴウオに出会いました。魚がいなくなった海で見つけた命です。それから定期的にもぐり、海底に沈んだ車、扇風機などの人工物や、そこで暮らし始めた魚たちを撮影した記録がこの写真集です。「海はすべてのものの受け皿になっています。」という著者の言葉が胸に響きます。

『ど根性ひまわりのき～ぼうちゃん』

漆原 智良／作 第三文明社 2015.7 P/㉗

被災地・石巻で、がれきを押しよけるようにして芽を出し、花を咲かせた1本のひまわりをご存知でしょうか。本書は、そんなたくましいひまわり「き～ぼうちゃん」とそれを取り巻く人々の絆を描いた絵本です。「大震災を風化させない」という思いのもとに「ど根性ヒマワリ保存会」が発足され、その輪はアメリカ、インドなど世界各地へと広がっています。力強いひまわりの絵とともに、復興への確かな希望が感じられる一冊です。